

## 第2章 銃後

### 東京大空襲③ 女性から見た戦争

ふなもとちとせ  
船本千歳さんのお話から

○東京大空襲 約十万人が亡くなった昭和二十年三月十日の空襲。空襲があったのは、深夜〇時七分。冬の北西の季節風が強かったため、火災が広がり、被害が大きくなった。

○焼夷弾 火災を引き起こすために作られた爆弾。

○隣組 国民総動員体制の一部として、町内会の下につくられ、互助・自警・配給などにあたった組織。

東京の空襲といえば、昭和二十年（一九四五年）三月十日の東京大空襲が有名ですが、私の家は、その時は被害を受けませんでした。しかし、五月二十五日の空襲で、我が家を失いました。

空襲を受けたのは、午後八時半から九時ごろのことでした。アメリカ軍による空襲があり、たくさんさんの焼夷弾が落ちてきました。しかも、この焼夷弾は、大きな弾から、いくつもの小さな弾が分裂して、ばらばらと落ちてくるものでした。

しばらくすると、お隣の家が燃えてしまって、我が家に火が移ってきました。そこで私は、家にいた父と弟と三人で逃げることにしました。父は体調が悪かったので、軽いものを持ってもらい、私はかさばる布団を持ち、弟には日用品が入ったりユックサクを担がせて火の中を逃げ回りました。

ただ三月十日の東京大空襲のような大規模な空襲ではなかつたために、なんとか火のないところに逃げることができました。そこは、かつて大きな屋敷があった跡地で、広い場所だったため、焼けたトタンを拾い集め、そこでテントを張り一夜を過ごすことにしました。

眠っていると、ふと男の人の声が聞こえてきました。「みんな、おなかがすいているだろうから、集まれ。」それは隣組の班長のおじさんの声でした。おじさんについて行くと小学校に着きました。そこでは軍隊が、とても大きなおにぎりとおみそ汁を配っていました。食べ物がない時代ですから、みんな行列を作って待っていました。わたしたちも行列

○疎開 子供や病人、お年寄りなど戦争の被害を受けやすい人を都市からより安全な地方に移り住まわすこと。

に並んでその食事をいただきました。

その後もしばらく食事をいただきました。とができましたが、一日一回の食事なのです。朝昼晩というわけにはいかず、家族三人で一食を分けていた私たちにとつては、とても十分な量とは言えないものでした。

そこでの生活では、父の病気はよくならないという判断により、父だけが田舎に帰ることになりました。品川駅からの列車で帰ることができると分かったので、弟がリヤカーに父を乗せて、約二十キロメートル離れた品川駅まで送りました。それが父との最後のお別れでした。父は疎開先へ行った後、病気で息を引き取りました。

父と別れた後も、軍隊からの一日一回の食事で、私と弟は過ごしていましたが、とてもお腹が空く毎日でした。そこで、どこかに食べ物はなにか、考



空襲

イメージ図

○防空壕 空襲の被害を  
避けるための穴ぐら、地  
下室。

えてみることにしました。すると、  
焼けた私の家の防空壕にお芋と漬  
物を置いておいたことに気がしまし  
た。行って見てみると、生のお芋が  
焼き芋になり、漬物の菜っ葉がお湯  
漬けになっていました。それでも食  
料品がなかなか手に入らない時代  
だったので、近所の方々にも分けて、  
みんなと一緒に焼き芋と漬物を食べ  
ました。

その後、我が家を失った私は、  
勤めていた事務所で寝泊りして過ご  
しました。一方、弟はまだ中学生だっ  
たので、親せきの家にお世話になる  
ことになりました。

家を失い、食べ物も満足に食べら  
れず、家族もばらばらに過ごすこと  
になってしまったのに、日本が負け  
るとはまったく思っていないせんでし  
た。



イメージ図

○進駐 他国の領土内に  
軍隊が進入して駐留する  
こと。

○青酸カリ 猛毒の薬  
品。猛毒で、致死量は  
〇・一五グラム。

そして、昭和二十年八月十五日。終戦を迎えました。負けるはずはないと思っていた私は、とても驚き、愕然としましたが、落ち込んでいられる状態ではありませんでした。

なぜなら、進駐してきたアメリカ軍に女性はひどい扱いをされると言われていたからです。隣組の班長さんは、「男性用のズボンをはきなさい。そして、顔に炭を塗って女性であることを隠しなさい。」と言うのです。そして、小さな紙包みを私に手渡して、こう言いました。「これは青酸カリです。もし、アメリカ軍の兵隊に襲われるようなことがあったら、これを飲みなさい。」

アメリカ軍が厚木から東京に進駐してきた日は、とても恐怖でした。しかし、遠くから見えたアメリカ軍の兵隊たちは、子供たちにチョコレートやガムを配っていて、その姿に私は安心しました。

戦争ではたくさんの方がなくなり、私自身悲しい思いをたくさんしました。どんな事情があっても、二度と戦争はしてはいけないということをしみじみと感じています。これから戦争のない平和な国づくりをしていきましょう。

## DATA

平成20年度南区平和事業

聴き取り

- ・平成21年1月24日
- ・石山児童会館



船本千歳(ふなもと・ちとせ)さん

- ・大正15年(1926年)生まれ
- ・札幌市南区在住